

東京都八丈町議会

2 住民に開かれた議会

(1) 念願の動画配信

住民に議会の活動を身近に知ってもらうために、町議会では議員による編集委員会が「議会だより」を年4回発行してきた。ネット環境に合わせてホームページの開設なども行い、見やすく分かりやすい広報を心がけてきたが、更なる広報媒体としてネットを使用したリアルタイムでの議場中継を切望してきた。

町にブロードバンドがやってきたのが平成15年の11月。議会としては議場からの動画配信を検討したが、昭和33年建造の庁舎は老朽化が激しく動画配信のための環境整備が難しい、また、厳しい財政状況から断念せざるを得なかった。

再度の好機は、平成26年5月の新庁舎開設。その前々年から議会では念願の動画配信を実施することを目標に様々な検討を行った。

動画配信には、数百万円の初期投資と年間百万円の運営経費がかかることから、財政的に厳しく、なかなか解決の糸口が見つからない。平成24年、議会だより編集委員からユーチューブを利用した配信なら、経費を抑えて実施出来るのではないか、との提案があった。

この提案に基づいて、議会事務局が調査を行い、実現性の高い手法との結果を得て、議会運営委員会、全員協議会を経て実施の方向を確たるものとした。

ちなみに、この方法によるとビデオカメラ、動画編集ソフト等で初期投資35万円、運営経費は0円である。

しかし、動画配信はあくまでも住民の身近に議会を感じてもらうための一手段でしかなく、その目指すところは議会活動を通して、町の課題に向き合い、まちづくりに参画してもらうことである。その目的に向かって、これからも試行錯誤は続く。

(2) 10年ぶりの「こども議会」

八丈町には、かつて1万人以上（昭和60年代）が居住していた。現在（平成26年11月）は、8千人を切るところまで減少しており、人口増対策が町の最重要課題の1つである。

ここ数年は年間100人ずつ人口が減少、さらに、高齢化率は36%。庁舎内に組織横断的なプロジェクトチームを作り、様々な観点から人口回復を模索している。

町は平成26年11月に町制施行60周年を迎えたが、この式典の目玉の1つと

して「こども議会」を据えた。

町内には小学校3校、中学校3校、都立八丈高校が存するが、高校を卒業すると進学のため、また就職のため、ほとんどの生徒が島を離れ、その後も大半が戻ることはない。

「こども議会」には3つの中学から3年生14人をこども議員とし、民主主義の学校である地方自治について体験し、学んでもらうとともに、島に戻ってきたいとの町の熱い思いを伝える場とした。

式典の一部として実施したため、島内の中学生全員、保護者、来賓など多数の観客を前に、熱気を孕んだ質問、答弁が展開された。

「こども議会」で届けた町からのメッセージは、多くの中学生、高校生から「町への思いが深くなった」との意見をいただき、実り多い場となったことを実感している。

「こども議会」については、今後も事業の継続を検討しているところである。

(3) 庁舎建設に合わせて画期的な議場を

庁舎建て替えにあたり、町では設計前の段階から全職員を対象に庁舎に対する要望を募り、より機能的で使いやすい庁舎を目指した。

議会としては、住民が足を運びやすく傍聴しやすい議場、議会のない時は住民も使える空間とすることを基本的な考え方とし、その実現に向けて検討を重ねた。

議場は真剣な議論の場であると同時に、「住民みんなのため」の場である。傍聴席と議場に段差を設けたり、ガラスなどで仕切るのは止そう。もっと傍聴しやすく、議会のない時は住民がだれでも使える親しみのもてる場にしよう、というコンセプトである。

結果、議長席を含む机などを手動ではあるが可動式とし、用途に応じた空間演出が可能となった。議会が開催されない日などは、議場が住民の方々の様々な会議や講習の場として、多くの利用をいただいている。

議会開催時は、傍聴席と議席との間を約2メートル、ベルトパーテーションで仕切り、高さは同じレベル。傍聴者は議会と執行部とのやり取りを同じ高さの目線で追いかけて、息遣いまで感じながら立ち会うことになる。臨場感と、親近感を体感できるような工夫で、住民が議会への関心を高めて欲しいと願っている。

こうした地道な取組みを積み重ねて、議会と住民の垣根をより低くし、住民に開かれた議会を一層推し進めたい。